

指導者からの指導内容

指導者：ふじみ野市立西小学校 教頭

鈴木 孝雄 先生



【コロナ禍において研究を推進する価値】

- ①子供たちの健康が最重要であることはもちろん、その中で研究を進めていくこともまた子供たちのためになるものである。
- ②この時期、この状況だからこそ、心のつながりがより重要性を帯びてくる。その意味で道徳の研究を進めていくことは価値がある。
- ③研究の成果が目に見えて表れるのは3年後。だからこそ、研究が終わっても取組を続けていってほしい。



各ブロックでの取組を
スライドで発表しました。

【各ブロックの発表について】

低学年：アンケートを低学年で行うのは困難な部分もあるが、実態把握において重要なものである。

中学年：ワークシートは、これから児童の評価をしていくうえで使っていくかなくてはいけない情報の一部である。書くのが苦手な児童がいることを想定し、これからもワークシートの工夫を進めていってほしい。

高学年：高学年ならではの多面的・多角的に考える中心発問、ゆさぶる発問を考えていくことは難しいことであるが、その難しさに取り組んでいくことは大切である。

ひばり：自分の考えを表現するのが苦手な児童に対して表情カードを使用することは、児童の実態から出発点を考えられていてよい。

【道徳授業をつくっていくうえで】

- ①子供も教師も道徳に楽しさを求めていることが必要である。授業づくりに苦しんでしまうと、授業は硬直してしまう。
→常にプラス志向で。
「わ苦わ苦」から「ワクワク」へ。
道徳授業をSF（少し不思議）に
- ②学習者は子供である。したがって子供を中心に授業づくりがなされるべきである。ただし、校長の方針をもとに、研究主任が中心になって。
→「教える」という立場から、「共に生き方を学ぶ」姿勢で。「落としどころ」という言葉を使わない。
- ③色々な学習過程がある。一般的な学習過程に固執してしてはいけない。
→導入の工夫「ほしい、みたい、聞きたい」となるように。
- ④実態調査、アンケートに工夫を。
→マイナス面だけでなくプラス面に着目する実態把握が必要。子供が求める道徳授業はどんな授業か。「好きな授業は道徳」となるようにして欲しい。
- ⑤深い学びにするために
→中心発問に15分はかける。教師はしゃべりすぎるとできない。子供の頭の中に「？」が生まれる授業がよい。子供が天井を向いているとうことは考えているということ。全員が自分の納得解をもてるように。教え込んだらできない。

これからの道徳教育

例えば…

- 教師がしゃべらない、子供の発言で進める授業。ただし教師が何もしないのではない！
- 思わず考え合い、子供が活躍する授業。
- 「子供の中に？が生まれる」問い、質の高い考えたくなる問いを。
- 「友達の考えに関心を寄せる集団」にし、視線は友達へ。
- 「伝える、教える」のではなく、教師も共に「考える」
- 子供にとって必然性のある流れを
- 周りの子を発言者の最大の理解者に
- 子供に手柄を取らせる。
- 授業をお互いに見合う、みんなで考える。
- 中心発問の後、子供の視線は…
- 授業で目指すのは、全員が自分の納得解をもつこと

先生方、授業を考える時、
「ワクワク」していますか？
「わ苦わ苦」していませんか？
特別の教科 道徳を
意識的にプラス志向で！



☆道徳教育は 「先手の教育」
☆道徳科の授業は
「自分が自分に自分を問う時間」